

季刊マーメイド

逗子市立図書館報
第5号

2014年8月1日発行

逗子市立図書館

逗子市逗子 4-2-10

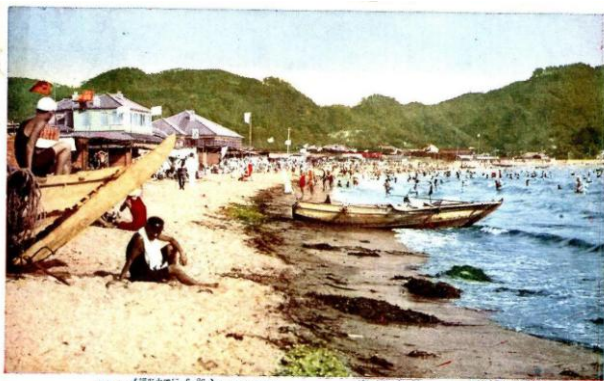
046(871)5998

(電話案内サービス)

逗子海岸海水浴場

～近代海水浴のはじまり～

幕末から明治にかけて、日本古来の「潮（汐）湯治」（しおとうじ）にヨーロッパの海浜療養を取り入れた「海水浴（うみみずゆあみ）」



近代海水浴のはじまり

ポストカード（相州逗子名所 海水浴場 大正15年6月26日撮影）

を推奨する三人の医者がいた。長
と専齋、松本順、後藤新平である。

長与は鎌倉に「鎌倉海浜院」の計画を立案し、後藤は『海水功用論』を書くなど、海水浴を通して国民の健康と公衆衛生を普及するという同じ思いを持っていた。しかし彼らの思い描く海水浴は、現在のわれわれの海水浴とはだいぶ感覚が違っており、海で遊ぶというより、健康増進のために海水に浸かることを広めようと活動していた。

逗子の海水浴

ほどなく、逗子でも海水浴の光景が見られるようになっていくのだが、逗子海岸での「海水浴」を紹介したのは誰だったのだろうか。土方歳三ら新撰組の活躍を描い

た司馬遼太郎の小説『燃えよ剣』の中には松本順（良順）の次のような記述がある。

・・・海水浴を最初に奨励啓蒙した人で、たしか逗子だったかにはじめて海水浴場をひらいた。当時の日本人は、海で泳いで遊ぶなどは奇想天外なこととしていた。

松本順は軍医総監を退任後の明治十八年、関東で最初の海水浴場を大磯に開設したことで知られている。その松本が逗子海岸にも海水浴場をひらいたということが。しかしながら松本順が逗子の海水浴場をひらいたという記述は他の資料には見当たらない。

『逗子市史 通史編』によれば、

逗子海岸が海水浴に適すると唱えたのは、軍医石黒忠憲（いしぐろただのり）らであった。

明治二十年頃、石黒は海水浴場の条件を次のように定める。

- 1 海遠浅にして急深なき海
- 2 貝類少くして足に創を受ける處なき海
- 3 藻類少くして海虫の栖息すること少き海
- 4 泥土不潔ならざる海
- 5 荒磯凸凹甚しからざる海
- 6 大河の河口に灌ぐなくして海水淡すぎざる海
- 7 近くに小山又は樹林・寺社等ありて散歩に便なる所
- 8 飲料水の良好なる所

（『逗子市史 通史編』より）

まさに逗子海岸は海水浴場の条件に一つ一つであった。

医師である石黒や松本らが推奨した、治療や健康増進のための「海水浴」はその後、横須賀線の開通、別荘地避暑地の発展とともに外国人や富裕層に広まり、その後は医師たちの思惑とは違った方向で、しジャーや夏の遊びとして盛んになっていく。

海水浴場の宣伝



『逗子と三浦 鳥瞰図』

停車場より逗子本通りに出て
十字路を右折して東郷橋を渡
り逗子海岸東郷浜（新宿海岸）
出づ。

右に大崎 浪子不動は突出の中央にあり。

左に鳴鶴ヶ崎、鐙摺城を眺め。

前は遠浅にして水清く波静か
なる海水浴場なり。

『逗子案内』 逗子海岸より

明治二十二年六月横須賀線が開
通し逗子駅が開業すると、逗子海
岸脇に、海軍を退いた丸富次郎が
高級旅館「養神亭」を開いた。そ
の頃から「海水浴」はしだいに庶
民にも浸透していき、明治三十
一年の海水浴シーズンは、旅館も民
家借り（夏期借家）もいっぱい

あった。しかし逗子海岸の観光客
向けのサービスは鎌倉などに比べ
るとまだまだ充実しているとはい
えなかった。そうした中、明治四
十五年七月二十一日、逗子最初の
「海水開き」（海開き）が行われる。
逗子町が観光事業に本腰を入れ
始めたのは大正十五年頃からであ
る。宣伝ポスターを製作し、駅前
に荷物預かり所を設け、海岸の援
助船に加え、飛び込み台、いかだ、
土俵などの遊具の設備、救護所、
簡易食堂、警戒用電灯も設置した。
昭和三年には観光客向けに、町役
場による観光案内書『逗子案内』
や観光地図『逗子と三浦 鳥瞰図』
も発行され、民間による宣伝に加
え、町を挙げた観光客誘致が行わ
れるようになっていった。

鉄道省「海の家」



鉄道省「海の家」 逗子市立図書館所蔵

逗子海岸に多くの観光客を呼び
寄せた大きな理由に鉄道省（後の
国鉄、現在のJR）の「海の家」が
ある。昭和四年開設の「鉄道省海
の家」は、海水浴客向けに、休憩、
脱衣、荷物の保管、温浴設備が備
えられた施設であった。

大人二十銭、小児十五銭とし、東京、上野、新宿、新橋、品川、横浜の各駅で乗車券とともに入場券を購入した場合は運賃が各五銭安くなる割引も設定している。七月一〇日から九月一五日まで開設された。この年の入場者は大人三万五九四二人、小児九六〇〇人で、合わせて八六二八円の収益をあげている。

『海水浴と日本人』畔柳昭雄より

翌昭和五年、湘南電気鉄道（現在の京浜急行電鉄）も養神亭裏に「海の家」を開設し、集客に拍車がかかった。

昭和八年、逗子の海の家ではタ涼み客のための夜の営業も行うようになる。又京浜方面からのカフェーの出張店（森永・明治製菓ほか）の営業も開始され、神奈川

県内の海水浴場の中でもより遊興的な海水浴場となっていた。当時力フェーの outlet に、風紀上ふさわしくないという地元住民の反対もあったが、その集客による地元飲食店への利益も生まれ、逗子町の振興と海水浴場の発展は切っても切れないものへとなっていく。観光と風紀の問題は現代にもそのままあてはまるテーマである。

~~*~*~*~*~*

現在の逗子海岸は134号線が開通し（昭和三十九年）、マンションやレストランが立ち並び、かつての面影を失っているものの、石黒らが喧伝した遠浅で波の穏やかな海は、ハーフマイルビーチとして老若男女、多くの観光客で今も賑わっている。

《参考資料》

- 『明治大正昭和年表―逗子の三代史―』手帳の会著 P 213.7
 『逗子市史 通史編』P 213.7
 『海水浴と日本人』畔柳昭雄著
 『司馬遼太郎全集 6 燃えよ剣』492
 司馬遼太郎著 918.6
 『逗子と三浦 鳥瞰図』29.7
 『逗子案内』小林章司編纂 29.7
 『懐旧九十年』石黒忠恵著 289.1
 『逗子と葉山 解説』イ
 増島信吉著 P 213.7
 『図説明治事物起源事典』マ2
 湯本豪一著 R 031.1

